

第15回日本医療薬学会年会 実施報告書

事業名：第15回日本医療薬学会年会

主催者：日本医療薬学会

年会長：五味田裕(岡山大学教授 医学部・歯学部附属病院薬剤部長)

会頭：乾賢一(京都大学教授 医学部附属病院薬剤部長)

後援：(社)日本病院薬剤師会、岡山県病院薬剤師会、(社)日本薬剤師会、(社)岡山県薬剤師会、(社)日本薬学会、日本製薬団体連合会、日本薬科機器協会、(財)岡山医学振興会、(財)積善会、岡山県医薬品卸業協会、岡山県、岡山市

実施日程：平成17年10月1日(土)・2日(日)

実施場所：岡山コンベンションセンター(ママカリフォーラム)

〒700-0024 岡山市駅元町14-1 TEL:086-214-1000 FAX:086-214-3600

岡山全日空ホテル

〒700-0024 岡山市駅元町15-1 TEL:086-898-1111 FAX:086-898-1200

岡山国際交流センター

〒700-0026 岡山市奉還町2-2-1 TEL:086-256-2000 FAX:086-256-2226

年会の趣旨

第15回日本医療薬学会年会が、平成17年10月1日(土)・2日(日)両日にわたり岡山市(岡山コンベンションセンター・岡山全日空ホテル・岡山国際交流センター)において開催することとなった。本年会は今回で15回目の節目の年でもあり、その間の医療薬学の急速な発展を踏まえて、さらなる展開を考え今回のテーマを「医療や薬学の未来へ翔く」とした。そして具体的な展開をはかるために「薬剤師の薬剤業務・教育・研究への能動的関わり」と題して展開することとした。

この医療薬学会(当初は病院薬学会)は、15年前に医療現場で働く臨床薬剤師の種々の課題に取り組むと共にその将来の方向性を考えるために設立された。当初は病院薬剤部勤務薬剤師が中心であったが、その後、薬学部、市中保険薬局、行政、企業関係者等の薬剤師が参画し、現在会員数が約5000名を越えている。その理由としては、近年の医学の急速な変化に相まって薬剤師の積極的アプローチが必要とされているからと解釈される。

その意味で今回の年会では、薬剤業務関係(現時点の問題、早期に対応すべき事項等)・医療薬学教育関係・専門薬剤師(がん薬物療法専門薬剤師等)・薬剤師による危機管理・個人情報保護と薬剤師・薬剤師の臨床研究(治験)への関わり・薬-薬-薬(学)連携・個別医療と薬剤師・薬剤師の緩和医療への関与・薬物乱用(麻薬・覚醒剤等)防止と薬剤師等々で、医療薬学領域の急速な変化に呼応した内容とした。

また、薬学教育6年制については、この年限延長の根底にある医療薬学教育において最良の実践

教育実施体制を種々考えていただくために意見交換・討議の場を多く設定することとした。

さらに、本年会では米国での臨床薬学の展開ならびに医療薬学教育の紹介をASHPのDr. Manasse ならびに Samford 大学薬学部のDr. Dean にお願ひし、さらに各国からの発表の機会も今回から設けた。これらのことは、海外の医療薬学関係者との意見交換の意味において各国の相互理解ならびに相互刺激の点で意味あるものと解釈したからである。

そのようなことで、本年会では前述した内容に関係して特別講演2題、教育講演3題、招待講演7題、またシンポジウム15題、さらに一般演題発表(ポスター)を組ませて頂いた。

一方、学会前日の9月30日(金)には、同会場で日本病院薬剤師会 病院薬局協議会を、また学会主催の市民公開講座(”いきいき健康”市民公開講座—お薬相談会)を”骨”をテーマに開催することにした。また10月3日(月)には、同会場で薬剤師業務のスキルアップ・思考アップを目的としたワークショップ(危機管理・患者対応・薬剤師教育)も企画した。

このように、本年会は質、量ともに大きな規模になるものと思われる。これらのことを通して薬剤師の業務はもとよりそれに関わる教育・研究に積極的に取り組む土台が培われれば幸いである。

[会費等の設定]

参加費	:	会員	8,000円(事前登録)	会員	10,000円(当日登録)
		非会員	12,000円(事前登録)	非会員	14,000円(当日登録)
		学生	3,000円(事前登録)	学生	3,500円(当日登録)
		海外	10,000円(一般)、		
懇親会費	:	一般	8,000円(事前登録)		10,000円(当日登録)
		学生	6,000円(事前登録)		8,000円(当日登録)
		海外	5,000円		
講演要旨集	:		4,000円		
いきいき健康”市民公開講座	:	参加費	無料		
ワークショップ(事前登録のみ、予約制)	:	参加費	5,000円(会員)	7,000円(非会員)	

[事業内容]

1. メインテーマ「医療薬学の未来へ^{はばた}翔く」—薬剤師の薬剤業務・教育・研究への能動的関わり—
2. 年会長講演、教育講演 3 題、特別講演 2 題、招待講演 7 題、
日本医療薬学会奨励賞受賞講演、シンポジウム15題、一般講演809題(ポスター)
3. ランチョンセミナー 9 題、イブニングセミナー 2 題、機器・医薬品・書籍展示
4. 特別展示「薬学生の長期実習の試行」—実習の具体的方略(構想を含む)あるいは事前実習を含むカリキュラムの特徴を紹介—
5. 特別展示コーナー「医療と「書」・「染色」・「備前焼」、そして薬剤師
6. いきいき健康市民公開講座(特別講演 I「緊張とプレッシャー」、特別講演 II「コツコツやろう! 骨

作り」、「おくすり相談会」岡山県病院薬剤師会会員、岡山県薬剤師会会員)

7. ワークショップ(リスクマネジメント・患者対応・薬剤師教育)10月3日(月)

シンポジウム中から

シンポジウム 13:「6年制薬学教育を考えるー長期実務実習への取り組み」

共催:薬学教育協議会、日本薬学会

- A. 「実務実習実現に向けての評価方法についてー薬学教育改革大学人会議と医療薬学教育委員会合同ワークショップからの提言」
- B. 実務実習モデル・コアカリキュラムのトライアル実施を踏まえて

参加申込大学及び病院 (41件):

北海道薬科大学、北海道大学大学院薬学部、弘前大学薬剤部、北陸大学薬学部、金沢大学医療薬学研究センター、公立つるぎ病院、金沢社会保険病院・薬剤の部、富山医科薬科大学、新潟薬科大学、星薬科大学、東京薬科大学、八王子消化器病院・薬剤科、昭和薬科大学医療薬学教育研究センター、武蔵野大学薬学部、明治薬科大学、北里大学薬剤部、千葉県薬剤師会、東邦大学薬学部、日本大学薬学部、東京理科大学薬学部、城西大学薬学部、名古屋大学薬剤部、岐阜薬科大学、京都薬科大学、神戸学院大学薬学部、神戸薬科大学、鳥取赤十字病院薬剤部、鳥取県薬剤師会、倉吉病院、岡山県薬剤師会、就実大学薬学部、広島国際大学薬学部、高松赤十字病院、徳島文理大学香川薬学部、徳島大学大学院、徳島文理大学薬学部、凶南病院、高知大学薬剤部、福岡大学薬学部、鹿児島大学薬剤部、琉球大学薬剤部、

特別展示

「薬学生の長期実習の試行」

ー実習の具体的方略(構想を含む)あるいは事前実習を含むカリキュラムの特徴を紹介ー

日時:平成17年10月1日(土)、2日(日) 9:00~15:00

参加大学(27校):

北海道薬科大学、東北薬科大学、国際医療福祉大学、日本大学、東邦大学、東京理科大学、城西国際大学、共立薬科大学、星薬科大学、東京薬科大学、昭和薬科大学、武蔵野大学、明治薬科大学、帝京大学、新潟薬科大学、北陸大学、名城大学、大阪薬科大学、神戸学院大学、神戸薬科大学、岡山大学、就実大学、広島国際大学、福山大学、徳島文理大学(香川薬学部)、福岡大学、長崎大学

参加者数(最終集計)

会員	2,357名	(事前 1,661名、当日 696名)
非会員	1,256名	(事前 628名、当日 628名)

学生	318 名	(事前 152名、当日166名)
海外	42 名	
総数(有料)	3,973 名	
招待	58 名	(うち、海外より 25 名)
報道	33 名	
招待者・報道を含んだ総数	4,064 名	
年会スタッフ(会員・学生)	120 名	
総数	4,184 名	

市民公開講座参加者数 約 400 名
 ワークショップ参加者数 131 名

年会事前参加者の所属および会員、非会員の内訳

	事前登録参加者			当日登録参加者			総数		
	会員	非会員	学生	会員	非会員	学生	会員	非会員	学生
病院	866	468	5	696	628	166	2,357	1,256	318
薬局	89	75	0						
大学	641	64	127						
企業	6	3	0						
その他	59	18	20						
計	1,661	628	152	1,490			3,931		
合計	2,441			1,490			3,931		

ワークショップ参加者内訳

	リスクマネジメント		患者対応		薬剤師教育		総数	
	会員	非会員	会員	非会員	会員	非会員	会員	非会員
		27	11	17	13	48	15	92
合計	38		30		63		131	

[事業成果]

第15回日本医療薬学会年會を平成17年10月1日(土)・2日(日)の両日、岡山市の岡山コンベンションセンター・岡山全日空ホテルならびに岡山国際交流センターで開催したところ、その出席者は4100名を超え、一般演題も締め切り期日には810題に達した。また両日を挟んで、9月30日には、「いきいき健康市民公開講座」を、また日本病院薬剤師会主催の病院薬局協議会が開かれた。さらに

年会後日の10月3日には薬剤師のスキルアップのためのワークショップが開催された。

今回の特徴の一つに、海外からの参加者に一般発表の機会も設定した点があげられる。東南アジアを中心に参加ならびに演題発表を募ったところ、中国から約20名、韓国から約30名、さらにタイ国から約20名と参加者があり、各国から20題近くの発表があった。国内外問わず発表していただき薬剤師業務・教育・研究等の意見交換とともに国際交流の点から意味があったと思われる。

特別講演では、社会福祉法人旭川荘理事長江草安彦先生から、「医療が変わる」をご講演いただき、またASHP副会長のDr. マナセからは、米国の医療体制と薬剤師の役割等について、医療ミス等の問題、病棟薬剤師の医療費抑制への関わり等についてお話を頂いた。

一方、教育講演ならびに招待講演では、日本病院薬剤師会長全田浩先生から「薬学教育6年制への熱き想い」と題して、先生が今まで長い間訴え続けてきた臨床に密着した薬剤師教育とその実現への想いを、また薬剤師認定制度認証機構理事長内山充先生から専門薬剤師制度等を含めた臨床薬剤師への期待を、さらに厚労省の川原章先生には、医療制度・薬事制度の改革と薬剤師についてお話を頂いた。

招待講演では、個人情報保護、リスクマネジメントとヒューマンファクターズ、米国の薬学教育、臓器移植、創薬と育薬、免疫抑制薬、薬剤師改革の動向について7題、その分野の著名な先生から現時点で私共が考えるべき点について解説ならびに指摘を頂いた。

一方、シンポジウム関係では、薬剤業務関係（現時点の問題等）・医療薬学教育関係（6年制薬学教育）・専門薬剤師（がん薬物療法専門薬剤師等）・薬剤師によるリスク管理・医療における個人情報・薬剤師の臨床研究（治験）への関わり・薬-薬-薬（学）連携・個別医療と薬剤師（遺伝子診断に基づく薬物治療等）・薬剤師の緩和医療への関与・薬物乱用（麻薬・覚醒剤等）防止と薬剤師の関わり等々で、まさにこの医療薬学領域の急速な変化に呼応した内容を設定したことにより、各セッションとも活発なご討議があったと解釈している。しかし各会場とも一寸の余地も無く立席の出るほどで、事務局としては出席者に対してご迷惑をかけた結果となった。

またシンポジウム中、来年からスタートする薬学教育6年制における長期実習への取り組み、とくに実務実習モデルコアカリキュラムの医療現場での可能性について討議した。そこでは3-4年後に迫った実務実習に備えて実際のトライアルを行い、何が問題かを早急に明らかにしなければならない。こうした考えのもと、この年会を期に、福山大学吉富教授・広島大学木平教授にお願いして、全国に先駆けて中国・四国地区、岡山、広島県内で病院薬局実習のトライアルを行った。岡山大学ならびに福山大学両薬学部の学生を対象に、岡山大学、福山大学、それに就実大学

のそれぞれの薬学部、また岡山大学病院、岡山日赤病院、三原日赤病院、さらに岡山県薬剤師会会営薬局ならびに広島南薬局で事前講義、事前実習、ならびに実践実務実習が、特に今回調剤を中心に実施された。その中特に受け入れ側からは、日常の業務と平行しての実践で、ソフト・ハードのさまざまな問題点が出てきた。と共に全国各地の受け入れ側でのトライアルの実施の必要性が出された。

一般演題では、一般演題820-830の応募が締め切り前にあった。その中からシンポジウムのテーマに合致したものを抽出させていただきその中に組み込ませていただいた。結果的に一般演題は外国からの演題も含めて810題となった。特に多かった演題は、医薬品の適正使用に関わる演題のほか、癌薬物療法およびリスクマネジメント関係、さらに薬学教育関係の発表が目にとまった。

一方、年会開催日の前、いきいき健康市民公開講座と称して、骨をテーマとして年会会場と同じ場所で開催した。約450名近くの参加者があり、そこでは五輪メダリスト森末真二氏より「緊張とプレッシャー」について、また藤田保健衛生学園大学医学部田中郁子先生からは「こつこつやろう骨づくり」と題してご講演をいただいた。その後岡山県病院薬剤師会と岡山県薬剤師会の会員によりお薬相談会が開かれ多くの市民の方々の相談にのった。

さらに年会後はオプションとして、薬剤師のスキルアップを目的にしてワークショップ3テーマもとに開催した。まず、はじめにリスクマネジメント関係では、飛行機事故防止等の観点からの医薬品のリスクマネジメントについて、また2つ目は模擬患者でのカウンセリング等を含む患者対応について、さらにはがん患者への外来の化学療法について、多くの方々の参加のもと実施された。各テーマとも各オーガナイザー、カウンセラー、コメンテーター、模擬患者研究会メンバーの先生方による駆使したシナリオでワークへの活発な取り組みがなされた。

最後に、今回の年会は、未来にはばたくと称して開催させていただいた。チラシ等で示された薬匙は、患者様への多種多様の病態に対するきめ細かい薬用量の秤量を示している。まさに患者個々、病態に応じた医療人の対応をあらわしている。出席者は、現状の課題を見つけ新しい展開をと考えたいという思いでこの年会に出席されていると思う。その意味で今回の年会の各プログラムが参加に現状を分析し、将来を考え、その考え方・方法が独りよがりにならないために世界の情報を収集して、自らの考え方ならびに技量を切磋琢磨して、引いては日本の医療薬学の発展に繋がればと思う。